

ビバハウス便り NO.75 原発被災地・福島県郡山市から若者を迎える

2011年4月23日

ビバハウス責任者 安達 俊子

今朝ふとビバの前庭に目をやると、小さな真っ赤な2本のチューリップが咲き始めている。これは、チューリップで町おこしをしている、上湧別町の講演に招かれた時のお土産だった。その周りを、レンギョの木々の黄色の小さい蕾が一斉に咲こうとしている。異常なことばかりが引き続く今年の春だが、季節は確実に時を刻んでいる。

3月11日は、私たち日本人にとって、歴史上初めて、民族としての生存が、永続的に許されるのか否やが問われる日になった。この日から、私たち日本人すべてのこれからの人生は、『福島原発』と切り離しては生きられない現実であることを、日々に教えられることばかりになった。

政界、財界、官界、業界、学界、マスコミが一体になって作り出してきた、『原発安全神話』が、今まさに、日本人の生存そのものを死に至らしめる、末期がんの様相を呈してきた。この末期がんの病巣を抉り出し、どこに今日の危機の根源と責任があるのかの究明を抜きにした、『国民みんなの力で乗り切ろう！』等とのスローガンにだまされてはならない。これはまさに戦時中は、『欲しがりません勝つまでは』、敗戦後は『1億総ざんげ』で、戦争の真の責任者を隠蔽し、すべての責任を国民全体に転嫁する新たな策動に他ならない。こんなことは絶対に許してはならない。そこからは、絶対に、日本民族の生存の危機からの脱出口を導き出す事はできないのだから。

2月14日にスタートした基金訓練2期生の「コミュニケーション・トレーニング」のプログラムを担当し、「東日本大震災と私たち」のテーマで、訓練生の皆さんの、この問題に対する考えを述べてもらった。それぞれの発表に対する、各人の感想も出してもらい、素晴らしいコミュニケーションが出来た。訓練生の中には、福島県郡山市から来ている女性もいる。彼女は、家族や友人たちが毎日福島で大変な困難に出会っているのに、自分だけ余市で訓練などを受けていて良いのだろうかと悩んでいた。スタッフも訓練仲間たちも、みんなが彼女の悩みを理解できるだけに、被災以来の毎日は本当につらいものだった。

このトレーニングの中から、今住んでいる余市から30キロも離れていない泊原発は本当に安全なのだろうかとの話になった。早速授業最終日の3月29日、泊原発の見学・視察の計画が決まった。この案内人には、夫の安達尚男をお願いした。尚男は、泊原発の建設に当初から反対した日本共産党小樽地区委員会委員（余市町議会議員）として、泊原発建設反対の一点で、泊村村長選挙を戦うために、当時前泊村議会議員だった佐々木光雄さん（故人）に立候補をお願いし、ともに選挙戦を戦った経歴がある。泊原発視察後、訓練生たちのそれぞれの思いを文章にまとめ、いくつかの新聞に投稿した。福島から来た女性の投書が、4月4日の北海道新聞に、『できること考え、出身地支えたい』という表題で、「職業訓練生・余市町」の肩書きで掲載された。5月6日開講の基金訓練3期生には、被災を避けて来る、男女1名ずつの若者を郡山から迎えることになっている。